

凄すぎる！

ロシアの組織的ドーピング違反！

昨年は、リオオリンピックが開催され、多くの日本選手が活躍し、私達に感動を与えてくれました。さらに、2020年東京オリンピックに向けて日本選手のさらなる活躍を予感させる大会でもありました。

スポーツには、人々を「奮い立たせる力」、「結びつける力」、「希望をもたらす力」があるとされています。

しかし、トップアスリート達の活躍の裏側では様々な問題も存在しています。

2014年、ドイツ公共放送のドキュメンタリー番組で報道されたロシア中距離選手の内部告発は、後に国際陸上界を震撼させる、ドーピングスキャンダルへと発展し、今なお終息の見通しが立っておりません。時系列で振り返ってみます。

ソチ冬季五輪では検査用の尿サンプルのすり替えにより、薬物が含まれていない尿サンプルを提出するといった隠蔽行為を犯し、さらに精緻かつ構造的なドーピング体制を構築し国家ぐるみで行っていました。

【主な隠蔽の手口】

- 検体差し替え対象者一覧表提示
- ネズミの穴から、採尿ボトルのやりとり
- 採尿したボトルキャップが開封された状態で返却
- 五輪開催前採取尿を持ってきた
- 1/3は検体差し替え対象者であった。
- 下水道技術者に変装した連邦保安局職員の入出



通称ネズミの穴
日中は食器棚があった。

また、リオオリンピックでのIOCは出場可否判断を各競技統括の国際連盟に委ねたことから、ロシア選手の出場可能とする道が開けたことから、クリーンな選手の出場の道が開かれました。

その結果スポーツ固有の価値を守り、かつスポーツから得られる感動を汚すことなくドーピングに塗られたリオオリンピックの汚名だけは防げたのではないのでしょうか。

しかし、リオオリンピック後の昨年12月9日に公開された独立調査人(Richard McLaren)の調査報告書(2nd Report)によると、同年7月18日公開された報告書(1st Report)において指摘された冬季五輪ソチ大会に係るドーピング違反のみならず、2011年～2015年にかけて広範囲に展開されていた1,000件を超えるドーピング違反に関しての証拠資料を伴うものであり、ロシアにおける組織的且つ大規模なドーピング違反行為の深刻さを具体的に示す内容となっています。

同報告書において指摘された競技大会、競技種目に関係する組織においては、クリーンなアスリートの擁護と競技大会の健全性の担保のために、速やかに適性な処置を講じることを強く要請しています。

国ぐるみの組織的犯罪は、解決の糸口を見いだすことができず今日に至っております。(スポーツ薬剤師・川村 仁)

2014年12月
ドイツ公共放送
ドキュメンタリー番組で報道
中距離のユーリア・ステパノワ選手内部告発

↓

2015年12月
IAAF(国際陸上競技連盟)
「ロシア陸連資格停止処分」

↓

2016年5月
米メディア
ソチ冬季五輪でも疑惑報道

↓

6月
ロシア陸上選手68人が判定を不服として、
スポーツ仲裁裁判所提訴

↓

7月18日
WADA(世界ドーピング防止機構)
「ロシア国家主導ドーピング」発表

↓

7月21日
CAS(スポーツ仲裁裁判所)
ロシア陸上選手の訴えを却下

↓

7月24日
IOC(国際オリンピック委員会)
「ロシア五輪参加全面除外せず」
各競技統括の国際連盟に判断委ねる

↓

7月29日
出場不可選手は8競技100人超に

↓

8月6日
IPC(国際パラリンピック委員会)理事会声明
ロシアパラリンピック委員会は、リオ大会への
選手派遣は不可